

毛利高政の生地について

宮下 良明

(会員・佐伯市古江区)

佐伯藩祖毛利高政の生い立ちと生誕地の史料には異説があり、不透明なまま今日に至っている。

一般に生国は尾張とだけはこの文献も共通のようであるにも拘わらず、尾張刈安賀かりやすかでの森（毛利）一族の事蹟等について、佐伯には確証する史料がない。そのために忘れ去られたものであろうか、理由として考えられることは、さまざまに伝えられている系譜に原因が有るのではないかと思う。

毛利氏系図の一部誤りについては、御手洗一而氏も史談一二〇号で指摘している。

また、後世になって流布した地誌にのみ頼り過ぎ、諸方の史料に目が届かなかったことも生地不詳の要因になったものと考ええる。

さて、高政は慶長六年（一六〇一）四十三歳の時佐伯藩主となり、翌七年伊勢守を継承して毛利伊勢守高政と

改名した。

この受領名伊勢守は、尾州国一流の系統者が受継いだ官位相当の呼稱で、高政の祖父宗氏なる人物も名乗っている。（略系参照）

高政が伊勢守を称えた背景にはそれなりの理由があり、家康が承認したのも尾張における森一族（毛利）の家系と、功績を承知の上で認めたものとみて間違いない。後述する尾張塘叢とうそうにも伊勢守と称えた武将が数々見られる。高政は切支丹信者ともいわれ、生涯を通じて謎の多い異色の人物であつたと想われる。それは天正七年（一五七九）三木城の別所長治攻め高政（二十歳）云々説、天正十年備中高松城攻め人質説（二十四歳の時）等の伝記がそれである。

（一）寛政重修諸家譜

寛政年中幕府の命によって大名、旗本等の提出した家譜をいうが、高政の時代より約二百年後、寛政年中に成立した系図にどれだけの信憑性があるのか明らかでないが、これによればその昔、寛永の頃までは高政の生国を尾張刈安賀と確認していたことが、当時の老職達が提出

した「寛永十九年差出候毛利系譜」を見れば分かる。にも拘らず、百数十年後の寛政家譜になって、近江鯉江系統に変更された。したがって、それ以後一般に流布された系図は、寛政の家譜を基本とし、もろもろの系図が作成され今日に至っている。次に高政の出世地荻安賀について筆を進めることにする。

(一) 高政の生国

(1) 荻安賀

高政は尾張ノ国（愛知県）中島郡荻安賀（一ノ宮市）花井方（大和町）で生まれた。ところが、明治年間の史書「鶴藩略史」には、永禄二年某月「公」開東郡荒子庄花筏村に生まれ云々とある。

そこで問題点

- ・ 荻安賀は開東郡ではない中島郡になる。
 - ・ 荒子庄なる荘園は開東郡にはない。また、花筏村も開東郡にはない。
 - ・ 荻安賀花井方を花筏に書違えた。
- 以上略史の違いを指摘したい。

一ノ宮市史によると、南北朝以後応永七年（一四〇〇）

足利政権の管領、斯波氏が代々尾張国守護職に任ぜられその代官（守護代）を織田氏が勤めた。しかし、下剋上の風潮を受けて斯波氏は途絶え、さらに永禄二年（一五五九）信長は織田氏本家を岩倉城で亡ぼした。この合戦に於て高政の母方の祖父、瀬尾小太郎が討死したのである。

さらに翌七年、今川義元を桶狭間に破った信長は美濃を攻略、天下統一の足掛かりをつくった。この戦国期の中心地が現一ノ宮市荻安賀地方なのである。

濃尾平野の中心に位置する荻安賀は古くから開けていたと言ひ、富貴の所なり云々と「信長公記」に記されている。また、美濃の斉藤道三と信長との会見場も荻安賀であったといわれている。

(2) 地名友重

中世荘園公領制の時代、この地方は荘園公領内に区分された一定の土地「名」の発達によつて、森（毛利）一族の多くは「名主」の系譜をひく土豪武士であったと一ノ宮市史は結んでいる。

余談になるが前史談で論及した民部大輔友重も荻安賀の出身に間違いなく、在庁名友重と荘園史尾張国の部に

記され、それは今も小字名友重として残っている。

(3) 荻安賀城

この城は浅井備中守新八郎なる武将が築き、その子田宮丸が居城としたが、天正十二年（一五八四）秀吉側と信長の次男信雄との戦「長島戦」で田宮丸は殺され、これを討った森勘解由を信雄は荻安賀城主とした。「尾張志」の記述によると、このとき勘解由は毛利伊勢守を名乗ったとある。

高政と勘解由との関係は史料不足のため詳しくは分らないが、同族であったことには間違いないようである。

(三) 小牧長久手の戦い

天正十二年（一五八四）三月、羽柴秀吉対織田信雄、徳川家康連合軍による小牧・長久手の戦いは家康方に軍配が挙げた。

この戦いで戦略上重要な位置を占める荻安賀は家康方の最前線拠点となり、城主となった森勘解由（伊勢守を名乗る）は、後に関ヶ原合戦で家康方東軍に属して討死した。「関ヶ原軍記集成」によれば、この時すでに家康の御家人となつて戦つたとある。（一ノ宮市史）このあと高

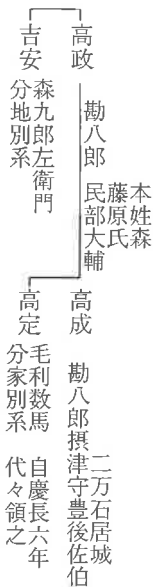
政が伊勢守を継承することになる。

(四) 尾張森系毛利氏

次の略系は塘叢に記録されたもので、「武鑑」に掲載された毛利氏略系を記した上でその違いを訂正している。

武鑑毛利

本国尾張



△慶長十五年築名古屋時毛利伊勢守

一万九千石 豊後佐伯

里民森裔訂之如左系図遺書等草藏之云云

右の系図は間違ひ、次の系図が正しい、の文意。

清和源氏

八幡太郎義家六男

森冠者義隆男

頼定——嫡男——義泰——十六代之孫

森伊勢守宗氏

於長島戦死

宗氏ハ末森、御器所、古渡三ヶ所領シ居リシカ不明

高次

嫡男

佐伯毛利家ニテハ政次嫡男高次一男の由御座候

森九郎左衛門

法号元水 刈安賀正福寺二石塔アリ

政次

二男 森十郎左衛門

尾州末森、御器所、古渡、三ヶ所ヲ領ス
此ノ末刈安賀ニ住ス

森藤三

三男

森忠左衛門 是又刈安賀ニ住ス

花井万村森苗字数多アリ是又藤三ノ末葉ニ候成

女

浅井信濃守室 田宮丸母 後号刈安賀殿
実 斯波武衛女

高政

初森勘八郎
後改毛利伊勢守

改藤原姓ト成

右以刈安賀説記之 武艦有小異

以上尾張塘叢に記載された森一族毛利系を示した。た

とえ簡略に記されていても、高政の生国を論及するにおいて、全く省略することは許されないと考える。

伊勢守宗氏の前は源氏に通じているが、塘叢の内容と時代の推移と背景を考えれば、管領斯波氏との関係を知ることができる。

(系図に武衛族とあるのは斯波氏本家筋) 九郎左衛門高次の父伊勢守宗氏は高政の祖父に当たるが、長島戦で死亡する以前の事蹟に付いては、史料不足のため後日の研究に待たねばならない。以上塘叢の記録から想察すると、諸資料に見られる九郎左衛門高次と、近江鯉江を結び付けるには無理がありそうである。なお、九郎左衛門について刈安賀正福寺には、墓と位牌があつたと記録している。

(1) 瀬ノ尾小太郎

高政の母は妙西尼といつて熱烈な一向宗門徒であつたという。尾州小比野村(現一ノ宮市)に生まれた。當時、尾張・三河国には上宮寺の流れを汲む一向宗寺院が多く、のちに毛利藩預かりとなつた、信州松本城主石川康長も三河国一向宗門徒で、妙西尼とは信仰上親しかったようである。

妙西尼の父瀬ノ尾小太郎は苅安賀に隣接する小日比野に居住した武將で、一ノ宮市史によると、当時織田信安（織田氏本流）に仕えて三千石を与えられていた。生国は加賀の国（石川県）で弓矢の達人であったという。永禄元年（一五五八）に浮野合戦（信長対信安の戦）で討死した。妙西尼は苅安賀の毛利九郎左衛門高次に嫁し、勘八高政を生んだ。

ちなみに勘八高政が生まれたのは永禄二年というから、小太郎が討死した浮野合戦と同じ時期になる。

(2) 正福寺と佐伯藩用人佐久間九郎兵衛

正福寺は現在一ノ宮市苅安賀花井方にある。その昔専称坊といった。末寺を多く抱え、寛文六年（一六六六）三河上宮寺から東本願寺直末（じきまつ）となつて現在に至つてゐる。この寺は、佐伯藩と以外な面で繋がりを持っていた。それは、慶長二年に死亡したと伝えられる高政の父九郎左衛門高次の、墓と位牌があつたという正福寺はたび重なる移転で今は不明というが、墓標は上層の者しか造立できなかつたというきびしい時代背景を想う時、苅安賀での高次は一門を統率する武將であつたことが想像される。さらに私見であるが正福寺は、森（毛利）一族の氏寺で

はなかつたかと思う。

今一つには、佐伯藩の用人、佐久間九郎兵衛なる者が、高次の墓の存否を尋ねて正福寺を訪問したと塘叢は記している。作為があつて記載したものでないから説得性をもつ。

佐久間家は代々佐伯藩の上級武士として幕末まで続いた。初代九郎兵衛は近江国の人、三代藩主高尚の御代、寛永十六年（一六三九）毛利家に仕官した。寛文五年（一六六五）の毛利家士分表にもかなり上位に名を連ねている。希しくも苅安賀で正福寺に、九郎兵衛が高次の墓を尋ねたという事実は、当時の毛利藩の歴史的背景を知る上で、誠に貴重な史料と考えられる。九郎兵衛訪問を期として前述した如く、寛政以後の毛利家譜が変更されている事にも、関連性はないか感想を述べて後日の研究としたい。

(1) 一ノ宮市史より

信長の尾張統一から、秀吉、家康と戦国期の移り変わる一ノ宮地方の歴史の中で、佐伯藩に関連する人物と内容を記述した中世編に、今まで知ることのなかつた史実を学んだ。更に判然としなかつた高政の生地も、市史の

中に記録されている。

一方、高政の兄兵橋重政のことにも触れており、毛利系譜に混乱はあつても、兵橋系一族も苅安賀出身の森一族であつたことが分かる。

兵橋重政（豊後守）は、文禄二年豊後杵築城主となり、文禄・慶長の役に二度出陣、慶長二年朝鮮で病死したと事蹟を述べている。なお、重政の事蹟は、日出町誌にも詳しく載っていることも付け加えておきたい。

余談であるが、前述した小牧長久手戦に関する項目には、稲葉一鉄、貞通父子と後世大名に取り立てられた各武将の名がみえて参考になる。

(ロ)尾張塘叢（徳島県市場町森秀郷氏蔵書）

文政年中、時の高学者「丹羽玄塘」^{にわけんどう}が濃尾地方に伝承されていた地誌、系譜、寺社記、古文書類を基にして収録した二十巻の史料中、尾張に關した六巻を尾張塘叢という。原本は岐阜県庁にあり、流布本は岐阜の木村次策という人が大正十五年に写したもので、史料的价值は最も高いとされている。

(ハ)森（毛利）一族の事蹟、系図等について

塘叢に記録されている高政に關係した系譜のうち、佐

伯との相違点については納得し難い点もあるが、代々受け継がれてきた尾張地方の地誌類としては、それはそれなりの真実が潜^{ひそ}んでいるものと考ええる。前に記した森系・毛利系図のうち、宗氏の三男森藤三の子孫が系図・遺品等を所蔵しているとあるのを見ても、信憑性の高いことが分かる。

塘叢の記録には美濃・尾張出身で九州四国の大名になった武将が多い。高政もその中の一人で、戦国時代の半生は生国にあるものと思う。

余談になるが、秀吉の高松城攻め（この時毛利姓となる）人質より、遙か以前に高政の先祖は尾張毛利姓を称えていたことを伺い知る塘叢の内容も、確かであろう。

史談一七五号・一七六号そして本号と続けて兵橋重政、民部大輔友重、高政と關係する同族についてその出自と疑問点を掲げ、能力不足を棚にあげて一石を投じてみた。理解し難い箇所も多々あつたことと思います。御容赦の程を。

最後に臨み、尾張塘叢六巻ほか膨大な関連資料を送つて戴いた森秀郷氏の御厚意に対し、深く御礼申し上げます。

【参考または引用史料】

一ノ宮市史 尾張塘叢 森資料 日出町誌
日本莊園史 佐伯史談

次号の原稿〆切りは

四月末日です。

原稿をお寄せ下さい。

送り先



『訂正』一七六号（P一六）

左の通り間違いがありました。訂正してお詫びします。

上欄				欄別	下欄				欄別
〃	〃	〃	〃	行	〃	〃	〃	〃	行
天文有十七年	申年三月	大いに戦い	並ぶを兼ね	誤り	1	4	7	9	12
国除あり	達すると聞きて之を召す	始めて河に見ゆ	善世を善くするに	形翔鶴の如し	是より世々				
天文十有七年	申年二月十日	大いに戦う	兼ね並ぶ	正	国除かれ	達するを聞き之を召す	始めて公に河に見ゆ	世を善くするに	山形翔鶴の如し
									是に由り後世

なお、全文中にルビで「くあく」と付したところは、「くよく」の間違いでした。